【論　文】

観光における「不確実性」
――人類学的研究における理論的可能性

土井 清美

はじめに

私たちは突然病気になったり不意にくじに当たったりする。いつ何時どのような危険や幸運が身に起こるか普段あまり意識することはないが、時として漠とした不安を覚えたり一縷の望みをもったりしながら不確実な日々を暮らしている。私たちは一般にどこか不穏当なニュアンスを込めて「不確実」という語を使うが、リスク・不確実性研究では、「リスク（risk）」は発生の可能性が数量的にとらえられる管理の対象とし、発生頻度を数値化できない事象を「真の不確実性（true uncertainty）」とする経済学者のナイト（Knight 1921）の分類を念頭におくのが一般的である。本稿ではリスクと不確実性を特段区別しないものの、「不確実性」というものを好ましいか忌まわしいか価値判断せずに焦点化するナイトの概念を出発点とする。後述するように、観光の領域におけるリスクや不確実性は、むしろ商機や魅力的な資源あるいは存在論的な意義をもたらす契機となりうるからだ。そうした見方に立ち、本稿は今後観光に関する不確実性を人類学的に明らかにするための準備作業として、リスク・不確実性に関する従来の諸議論のあいだにある溝の所在を明らかにし、それらの溝を乗り越えるような理論的可能性について論じる。不確実性に関する諸議論のあいだにある溝とは、「不確実性」というものを、事実それ自体として実体的に扱う議論と社会的な力学のなかで生み出される観念的なものとして扱う議論という２つの理論的枠組みの間にあ

中央学院大学
現代教養学部講師

る平行線である。

それは対立的というよりもすれ違いの関係にあり、議論に際して必ずそのどちらかのみに焦点があてられるという特徴がある。これによりどのような経緯で特定の事象が不確実な事態として立ち上ってくるのかその輪郭が明瞭にはなるが、他方で複雑な現実を把握する方法として十分とはいえない。これに対して本稿は二つの枠組みが共有する前提を指摘したうえで、それとは異なる、時間性に着目した第三の理論的観点を示したいと思う。産業界や旅行者といった主体が不確実な状況をいかに飼いならすかという従来の問い立てに対して、不確実な状況に晒されながらその状況に踏み留まろうとする相貌を掬い取ることこそすぐれて人類学的考察の対象となりうると私は考える。その方途として本稿の最後で提案するのは、天候、地理的条件、身体、情動などに表われるバリエーションを孕んだ時間性に着目する記述分析のあり方である。

リスク・不確実性研究の動向

近年、欧米を中心に様々なテーマについてリスク・不確実性研究が急拡大している。その背景にある今日的な特徴として、地球温暖化や放射性物質による健康被害、パンデミックなど地球規模でみられる予測不能な事態が本質的に科学技術の進展によってもたらされており、さらにそうした不測の事態を制御し管理するシステムや組織設計が科学技術によって下支えされているという議論（市野澤 2014）が一定の説得力をもっているからである。本来であればいつの時代にもあるはずのリスク・不確実性の、とりわけ現代に特徴的な問題は、ベックが指摘するように（Beck 1992: 183）「危険の源は無知ゆえではなく、知があるゆえに生じている」のである。社会学では 1980 年代以降、こうした現状についてベックを代表とする『リスク社会論』が登場した。そこで描かれるのは、確率統計学的な方法によって未来の不確実性を管理の対象とする志向であり、それによってさまざまなリスクが可視化されると同時に対処の仕方が各個人の責任として帰され、結果、人々はリスクへ

の意識を強く深く内面化するという社会的動向である（Beck 1992）。

このような脈絡において、観光は不確実な事態の両義性を検討するうえできわめて好適な素材といえる。なぜなら、よく知られているように観光は科学技術を含む近代化（インフラ整備、労働と余暇の創出、グローバル化）と不可分に発展してきた現象であり、また、観光の時空間で生じるリスクや不確実性が時に業界や旅行者にとっての資源となってきたからだ。すなわち『リスク社会』が措定する科学技術の進展した近代的事象の一つの極にある観光は、リスクコンシャスな個人を作るだけではなく、新たなサービスを生み出しもする分野なのである。

次節では、観光分野ならではのリスク・不確実性の問題の重要性とそれに関連する議論の動向を紹介する。そこから明らかになるのは、何を不確実な事象として扱うかをめぐる認識論的乖離がどのような前提によって生じるかということである。

観光分野ならではのリスク・不確実性[i]に関する問題の重要性

訪問地に関する旅行者の知識は当然のことながら大幅に限定されている。観光産業はだから、これまでヒルトンやシャングリラなど国際ブランドのホテルをグローバルに展開するなどして不慣れな土地において生じうる健康や治安等の不安を減じ、ネガティブな印象を払拭するサービスを提供してきた。また、インターネットの普及で宿泊料金比較サイトや取引トラブル回避のためのウェブサービスが隆盛している。トリップアドバイザーなどの旅行口コミサイトでは、現地情報や個人の旅行経験といった埋もれがちな情報をウェブ上で体系化し、非人格的な命令の体系ともいえる旅行ガイドブックとは異なる振幅をもった新たな体系知を提供するサービスをおこなっている（Williams and Baláž 2014）。このように消費者と旅行商品の販売者の間、あるいは販売者間にある知の不均衡にともなうリスクは観光業界では商機にもなってきた。また、リスクを回避するための観光産業の役割とは対照的に、危険や困難な経験およびそれに伴う興奮を求めるため噴火口を訪れたりや暴

風雨を体感するなど冒険ツーリズムが近年隆盛している。

観光に関するリスク・不確実性を扱った研究を眺めると、個人による意思決定から国家による観光政策におけるセキュリタイゼーション[ii]まで扱われる対象範囲は広いが、そこで展開される考察はリスク管理の技術とそれに回収されえない個人の認識や実践との間に生じるズレの洗い出しが主であり、理論的研究はまだ少ない（Pizam et al 2004）。そうしたなか数少ない理論的研究のひとつが、リスク・不確実性を管理する航空業界においてパイロットのエラーをなくすための管理術 CRM（Cockpit Resource Management）によって予測不可能な事態を予測可能なリスクに変換しようとする航空業界の担当者らについての事例研究である。そこでは掴みどころのない不確実性を統御すべき対象へと一つ一つ変換するプロセスが延々と繰り返される（渡邊 2014）。また、個人が経験する不確実な事態を肯定的かつ理論的に捉えた概念に「エッジワーク edgework」や「フロー」がある。ライン（Lyng 2008）によると、エッジワークとは生と死、秩序とカオス、制御と不確実性の間を行き来しながら交渉しそのなかで生を実感することである。不確実性や危険の責が個人に帰せられるベックのリスク社会論を足がかりに、危険や困難を克服し自己物語や自尊心を立ち上げる機会として、バックパック旅行や登山、冒険旅行といったある種の観光があるとラインは述べる。またチクセントミハイ（Csikszentmihalyi 1974）による「フロー」概念は、自己と環境、刺激と反応、過去・現在・未来の差異が曖昧になる悦楽的な没頭状態をさす。フローの状態では自己十全感が横溢し最終的にはこの経験を通じて真のあるいは新たな自己を発見すると言う。フロー概念を用いた観光研究では、フローを志向する旅行者がリスクを積極的に選好するという議論もある（Williams and Shaw 2011）。

フロー概念においては自己認識は減衰するものの、状況を統御する点においてエッジワーク論と同様、不確実な時空間に自主的に足を踏み入れる人が、その経験を糧に自己を強化し更新するという論展開がなされる。別の言い方をすれば「主体が状況判断し制御する」ことこそが不確実な状況におか

れた旅行者の成長過程であり、観光における不確実性の歓迎されるべき側面ということである。

認識論的な差異を生み出す「主体化と客体化」

ではここまでの諸議論から何が浮き彫りになるだろうか。それは不確実な状況に様々な手立てで働きかける（「強さ」「弱さ」の違いがあれど）主体のありようである。ではその主体が向き合う不確実な事態にはどのような特徴があるだろうか。これについてはすでにウィリアムズとバラーシュ（Williams and Baláž 2014）によって指摘されているように、観光におけるリスク・不確実性を実証的（positivist/objectivist）なものと捉えるアプローチと構成主義（constructivist）的なものと捉えるアプローチの二つがある。すなわち前者において人間の知性や認識する力は有限であり、リスクや不確実性というものは客体化されうるという前提で議論がなされており、焦点があてられる「不確実性」とは、宿泊地の隣人の騒音、食中毒、悪天候、津波、暴動のほかグローバルな経済危機、軍事介入、地震などである。後者は社会的な諸関係の中で作用する力学が不確実な事態を現象させるという前提のもと、例えば新奇性を求める個人旅行者はパッケージツアー参加者が考える健康や治安リスクをリスクとは捉えないなど、時にどうしてそれが不確実な現象なのか理解に苦しむことなどをも含めて文脈依存的な不確実性として焦点化している。

こうした何を「不確実なもの」と扱うかの差異は、主体と客体の輪郭が明示される議論においては当然のごとく噴出する認識論的差異といってよい。別の言い方をすると、不確実な事態を客観的な事実とする場合、不確実な事態はそれを認識する側から独立にあって「認識される側」にあるということになる。そして不確実な事態を社会的に構成されたものとする場合、不確実な事態は「認識する側」におかれるということである。不確実な事態がどのような性質をもち、それと向き合う主体とはいかなる属性か、その主客の輪郭が明瞭な議論はしかしながら、現実の複雑さを矮小化してしまうおそれが

ある。実際のところ私たちはリスクや不確実を「認識される側」ないし「認識する側」として割り振ってそのいずれかばかりと向き合って生きているわけではない。この認識論的に主客のどちらかに分かたれた「不確実性」[iii]とは別の観点こそ今後の不確実性をめぐる理論的展開のひとつのカギとなりえよう。

実在論と観念論のあいだ

こうした「不確実性」と名指し名指される主客の輪郭を洗い出すことによる認識論的な溝を乗り越える方法を考えるとき、アンリ・ベルクソンの「イマージュ」の概念は参考になる。ベルクソンは『物質と記憶』の第７版への序言のなかで、事物と表象の中間にあるものを捉えることを提案し、実在か仮象かではなく、経験の相に即していわば「素人的に」考えるよう促している。

> 実在論も観念論も同じように行き過ぎた理論であることをわたしは示すつもりだ。つまり、物質をわれわれが有している物質についての表象に還元してしまうことも、物質は確かにわれわれのうちにさまざまな表象を生み出すものではあるものの、それらの表象とは本性の異なる別物であると考えることもともに誤りであることを示すつもりである。[中略] 哲学的思弁に縁のない人をつかまえて、バークレーがいおうとしたように、あなたの前にある対象、あなたが見たり触れたりする対象は、あなたの心のなかに、あなたの心にとって存在するだけであるとか、さらにもっと一般的に、一つの心にとって存在するだけなどと言えば、その人はずいぶん驚くことだろう。［中略］他方、この相手にむかって、対象はそこに知覚されるものとはまったくちがって、目に見える色も、手に感ぜられる抵抗も持たないなどと言えば、相手は前に劣らず驚くだろう。だから常識にとっては、対象はそれ自体で存在し、しかもまたそれ自体において、私たちがみとめるときのままの生彩ある姿をしている。
>
> （ベルクソン　1914: 5–6）

この論を本稿の論旨に即して受け止めるならば、不確実な事態を客観的な事実とするのも社会的に構成されたものとするのも誤りで、感官を開いたときに感受されるものと在るものとを同等に捉える常識人の観点が重要ということになる。別の言い方をするなら「不確実な事態」の輪郭を洗い出してそれを思弁的ないし遡行的（さらに辿っていくとその背景には…）に検討するのではなく、出来事が生じているそのただ中に焦点を合わせ、内在的に考えることが求められるのである。その点、ある意味で「素人主義」を貫き、主客の分離を極力避けつつ記述分析してきた人類学的考察にはどのような可能性が開かれているだろうか。

人類学における観光の不確実性に関する研究[iv]

人類学において観光の不確実性に関する研究はまだ少ないが、商業的冒険ツアー（商品化された冒険）を扱った論文が観光以外の学術誌で何点か存在する。以下に言及するフレッチャー（Robert Fletcher）によるラフティングツアーの民族誌では、不確実な対象が何であり、誰によっていかにして飼いならされるかといった論の展開はない。そうではなく、自然環境、ツアー参加者、ガイド、調査者のいずれにとっても確実なものは何もないなか、主客や不確実性の輪郭が不明瞭な様相それ自体を冒険ツアーの存在論的な意義として描出している。以下、フレッチャーの民族誌の概要を眺めていこう。

商業的冒険ツーリズムでは通常、ツアー催行者が「一見すると危険そう」な側面を掲げ真に危険な要素を隠匿することによって、参加者が欲望する危険だが絶対に安全という幻想が提示されるしくみが働いている。それに対してフレッチャーは人類学者タウシグ（Taussig 1992）の「公然の秘密（public secrecy）」概念を用いて、世界的に有名な激流で知られるチリとカリフォルニアにおいてラフティングツアー参加者が安全（確実）と危険（不確実）の両方をないまぜにしながら同時に体感する様子に焦点をあてている。

秘密といえば関与するAによってBに対して隠されるものと私たちは考えがちだが、タウシグの「公然の秘密」論とは、社会の構成員が偽りの事象を

共謀しフィクションがそれとして明示されないようにすることを指し、秘密を暴くという行為こそが逆に不確実性や神秘性を強化するというものである。ラフティングツアー参加者が求めるのは「アドレナリン全開」で、予測不可能で興奮を巻き起こす広告の文言通りの経験である。催行者はその文言が正確に消費されるように最大限の努力をする。たとえば参加者は昼食の時間の遅れや天候によるキャンセルを容認しない。ツアー催行前に危険事項の説明を受けた参加者は支払った金額に見合う恐怖と興奮を求める。参加者が求めるのは不確実性どころかむしろ確実性である。例えば「私は川に放りだされますかね」と参加者がガイドにたずねる時、彼が期待する返答は「さぁ、どうでしょうかね」ではなく「間違いなく放り出されますよ」である。彼らはちょっとしたアクシデントに対して表面上は慄きつつも、実際に溺れるかもしれない状況にあって、例えばボートから落ちた後も足をばたつかせることなどせずなすがまま浮くなどして、ガイドに全幅の信頼を置く態度をとる。ガイドの方は過去無事故であったことを例に示すなどしてその不確実性を隠匿する。こうなると必然的に冒険的要素が次々と減衰されてゆくはずだが、ガイドも参加者もその矛盾を指摘することなくツアーが続行される。もちろん、なかにはこれが本当に冒険だろうかと疑問を呈する客がいたり、冒険なのに安全という矛盾が口コミを通じて明らかになることもある。しかしそこでも確実性の表明に加担しつつもそこに疑問を差し挟むという行為によって、秘密の共犯関係がもたされ、そのことこそがむしろ冒険の神秘性や「わからなさ」を強化していく。しかしだからといって冒険ツアーは偽物の冒険というわけではない。冒険を模倣する冒険ツアーは真に危険な要素も、そしてそれがどこまで制御されうるのか不明瞭であることも、「冒険ぽく」なるようツアーの全員で仕立てる内実も、全て隠匿される呪術的実践なのだから（Fletcher: 2010）。

フレッチャーの研究が人類学的にすぐれている点は、身体におよぶ危険、模倣による真正性の不在、隠匿、水流の予測不可能性など、諸々の不確実な事態をその質的多様性を捨象することなく捉え、一見すると軽佻浮薄そうな

ラフティングツアーの中にある奥深さを描出していることである。前述の「フロー」論や「エッジワーク」論では、不確実な状況を克服することを通じて主体を更新していく様が前景化されるが、実際のところ不確実な状況を前にして、旅行者が常に主体的でありうるはずがない。むしろ状況をどの程度コントロールできているのか判然としない境界的な状態に身を置くことこそある種の観光における経験を特徴づけているといえる。不慣れな場所ゆえに「想像された未来」と「表出した現実」の乖離が普段よりも顕著になりやすいが、その責が個人に帰されにくい点において、旅行中というのは行為を統御する主体をつよく要請される日常生活から脱する実践となるといえる。その意味ですべてではないにせよ、ある種の観光において不確実性が歓迎されるのは、フロー論やエッジワーク論が前提とするような「状況を統御し乗り越えるしっかりした自己」との出会いではなく、手探りで窺い知ることになる様々な質感をもった異世界との出会いというコンテクストにおいてなのだ。

終わりにかえて

先のラフティングツアーについての人類学的研究の革新性を本稿の論旨に沿って整理するならば次のようになる。まず不確実な事態を歓迎すべきか否か、大事か些事かといった価値判断のフィルターを通す前の不確実な事象を扱っていること。次に不確実な事態に関与するのが時にガイドであったり参加者であったり水流であったりと、その主客も不確実性の輪郭をも曖昧にしたまま分析記述していること。そして不確実な事態を実体的なものとも社会的に構築されたものとも区別せず質的に多様で複雑な相貌を重層的に描出していること。近代化とともに展開してきた観光の今日的不確実性をより現実に即して理解することを今再び思い起こすならば、不確実な輪郭を認識論的に浮き彫りにするのでは不十分である。不確実性は、多様なグラデーションや強度をもって描出されることによりリスクコンシャスな個人に回収されない複雑な相貌を捉えることができるはずだ。

本稿はしかしながら「結局すべての現象は不確実である」と言いたいわけではない。仮にすべての現象は不確実であるとすると「すべてのことは一回的である」という言明が成り立つが、人類学者の箭内が指摘するように、実際のところ生ないし自然現象は、一回的であると同時に反復的であることは自然科学が明らかにしてきたとおりである。生物の個体発生やたんぱく質合成において遺伝情報の複製が生じ、PTSD では一回的な体験が反復される（箭内 2018）。すなわち不確実性の問題とは、「想像された未来」と「表出した現実」の乖離と、それによって構えざるを得なくなる「迫りくる未来」との間に充溢する多様なバリエーションをもつ時間性に目配りしながら捉えることが有効なのである。

多様なバリエーションをもつ時間性とはどういうものか。少なくとも連続したり循環する出来事の中に不意に生起する時間性だけではないだろう。天変地異の生起について述べる環境社会学者のセルシンスキ（Szerszynski 2010）は、リズミカルな関係に対する応答と注意の調律という時間性への着目を提案する。不確実性の問題を必ずしもクロノス（客観）・カイロス（主観）の二種に分離／集約して論じる必要はないだろうが、不確実な事態の多極的な相貌を捉えるヒントとなる考え方である。

周囲の人やモノとの発見的な関係が普段よりも引き起こされやすい観光という状況において、確率の高い事象に対する例外的事象、近代科学に対する生きる身体、いつものことに対する未知なる出来事といった二極のうちの一極としてではなく、時に秩序だって見えたり、分散的であったり、反復的であったり、一回的であったり、過渡的であったりするような多様な時間性のバリエーションをもつ不確実性を捉えてこそ、リスク・コンシャスな主体に還元されない世界像が描出され、人類学的に新しい観光理論の展開があると考える。

注

i　観光分野では実務・学術研究を問わず「リスク」「不確実性」という語は厳密な定義のもと使用されているわけではない。また、不確実性を肯定的に捉え返す議論では異なるターム（偶有性 contingency、ちょっとした出来事 mishaps など）を用いて議論されていることにも留意したい。

ii　「セキュリタイゼーション（securitization）」、安全保障化ともいう。ここでは金融分野ではなく国際政治学における Ole Wæver による概念を指す。ある事象が安全をおびやかす問題であることとして対象化される行為遂行的プロセス。安全保障化する主体、外敵脅威、脅威にさらされる対象、その事象を脅威として受容する聴衆の 4 者から構成される。

iii　同様の差異は巡礼における聖地論にもあてはまる。山中（2012）は、聖性の有無を知る根拠は、それを認識する側から独立にあって「認識される」世界にあるのか、それともあくまで「認識する側」におかれるかという対立として整理している。

iv　近年の人類学では、その古典的研究である「伝統社会」を対象とした災厄に対する人々の向き合い方の認識論的分析（たとえば Douglas and Wildavsky 1982）という従来的な枠組みから歩みを進め、リスク社会論に対する批判的検討が隆盛している。「リスク社会論」は確かにマクロな潮流としては確かに妥当ではあるが、『リスクの人類学』（東ほか編 2014）では、制度や技術が生み出したリスクが人々の生き方や判断に介入するかを明らかにしただけでなく、不測の事態を察知しながらもそれに対処する合理的な主体とはなり切れない生に光をあてた。こうした研究をふまえ最近では賭博やニート、不妊治療などの現場における調査や事例研究を通じて、リスク概念では扱いきれない不確実な事態を、むしろ未来の可能性をも含む現象として新たに捉えかえす研究も登場している。このようにリスク・不確実性に関する人類学的研究では、それを世界的に波及する懸念すべき社会問題として徴づける前に、多種多様なかたちで現れる「不確実な中を生きようとする力」を個別具体的な事例を通して捉えてきたといえる。

参考文献

東賢太朗ほか編（2014）『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』世界思想社
市野澤潤平（2014）「リスクの相貌を描く――人類学者による「リスク社会」再考」東賢太朗ほか編『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』世界思想社
ベルクソン・アンリ（1914）『物質と記憶』高橋里美訳、星文社
箭内匡（2018）『イメージの人類学』せりか書房

山中弘（2012）「作られる聖地・よみがえる聖地――現代聖地の理解を目指して」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂

渡邉日日（2014）「航空機事故をめぐるリスクの増殖――コミュニケーションというリスクに関する理論的寓話」東賢太朗ほか編『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』世界思想社

Beck, U. (1992) *Risk Society: Towards a New Modernity*, Sage.

Csikszentmihalyi, M. (1974) *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play*, Jossey-Bass.

Douglas, M. and Wildavsky, A. (1982) *Risk and Culture: An Essay on the Selection of Technical and Environmental Dangers*, University of California Press.

Fletcher, R. (2010) The Emperor's New Adventure: Public Secrecy and the Paradox of Adventure Tourism, *Journal of Contemporary Ethnography*, 39(1), 6–33

Knight, F.H. (1921) *Risk, Uncertainty and Profit*, Houghton Mifflin.

Lyng, S (2008) Edgework, Risk and Uncertainty, in Zinn, J.O. (ed), *Social Theories of Risk and Uncertainty*, Blackwell.

Pizam, A. et al (2004) The Relationship between Risk-Taking, Sensation-Seeking, and the Tourist Behavior of Young Adults: A Cross-Cultural Study. *Journal of Travel Research*, 42: 251–60

Szerszynski, B (2010) Reading and Writing the Weather, *Theory, Culture & Society*, 27: 2–3, 9–30.

Taussig, M. (1992) *The Nervous System*, Routeledge

Williams, A. and Baláž, V. (2014) Tourism Risk and Uncertainty: Theoretical Reflections, *Journal of Travel Research*, 54(3) 271–287.

Williams, M. and Shaw, G (2011) Internationalization and Innovation in Tourism, *Annals of Tourism Research*, 38 (1): 27–51

Considering 'Uncertainty' in the Tourism Field: A Theoretical and Anthropological Perspective

Kiyomi DOI

ABSTRACT

In recent discussions of risk and uncertainty, much attention has been centred on how the intention to tame uncertainty through stochastic means which enable risk visualisation produces risk-conscious entities. By contrast, by focusing on contemporary tourism practices and sectors, this paper critically considers uncertainty from a new anthropological perspective, based on the idea that unmanageable uncertainty sometimes not only attracts tourists but also evokes ontological significance in our lives. First, this paper clarifies the conventional debate on risks and uncertainty in the field of tourism. Then, drawing on Henri Bergson's concept of 'image', this paper suggests a theoretical perspective which considers lived experiences and temporality, to overcome epistemological discrepancies in the understanding of risk and uncertainty and reflect its richness and diversity.